OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代日本語の敬語とスンダ語の敬語との比較研究 : 特にその敬語法の体系をめぐって
Author(s)	アデ, スラマット
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1980, 14, p. 25-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56543
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代日本語の敬語とスンダ語の敬語との比較研究

——特にその敬語法の体系をめぐって——

アデ・スラマット

Ⅰ．はじめに

外国人が日本語を学ぶ際に、最も困難だと思われることは、日本語の敬語法の習得であろう。

私はインドネシアのパンドン市パジャジャラン大学で日本語を教えているが、幸いなことに、西部ジャワで使われているスンダ語(BASA SUNDA)には、日本語と比較的似通った敬語法が存在する。

そこで、この論文では、スンダ語の敬語法を紹介するとともに、日本語との比較対照研究によって、両者の相違点を明らかにしたいと考える。

Ⅱ．インドネシアにおけるスンダ語の位置と敬語法成立の歴史的背景

インドネシアは、四十を超える種族と多数の島々から成り立つ国家である。現在、公用語として使用されている言語はインドネシア語であるが、その外に、スンダ語・ジャワ語・マドゥラ語・バリ語・アチェ語・パダン語・バタック語・ダヤック語・マカッサル語・ブギス語・トラジャ語などの各種族の言語もまた、それぞれの地方の日常会話において使用されている。

スンダ語は、マライ・ポリネシア諸語の中のインドネシア語派に属する言語で、ジャワ島の西部地方において用いられている。その使用人口はお

よそ二千万人と推定され、インドネシアの重要な地方語の一つとして考えられる。

歴史的背景から見ると、スンダ語には言葉の階層(Undak-usukna basa)という敬語法はなかったと考えられる。十四世紀頃に、西部ジャワにはヒンズー教のパジャジャラン王朝が建てられていたが、“BATUTULIS”の“BOGOK”にある古代スンダ語で書かれた碑文を見れば、当時使われていた言葉には敬意表現的なものはなかったということがわかる。

ところが、十六世紀頃、中部ジャワにマタラム・イスラム王朝が建てられ、西部ジャワにまで勢力を伸ばした。当時のスンダ官吏たちはイスラム教を身につけるためマタラムへ行き、多少のジャワ語をスンダ語に導入して、特に敬意を表現した言葉として使用するようになった。これがスンダ語における敬語法成立の端緒となったのである。

時代とともに、従来は官吏たちの間だけで使用されていた敬語がスンダ人の生活に密着したものとなり、スンダ語自身の敬語体系にまで発達したのである。

このように、スンダ語の敬語法はジャワ語の敬語法の影響を受けて成立したものであるから、個々の単語もまたジャワ語を用いることが多い。例えば、以下のようである。

	常体語	尊敬する語
日本語	スンダ語	ジャワ語
左	kenca	kiwa
泣く	ceurik	nangis
一緒に	jeung	miwah
泊る	meuting	ngawengi
着る	make	nganggo

ジャワ・マタラム王朝の征服によって支配と被支配の関係が成立し、支配者たちの言語であるスンダ語に導入されて、言葉の階層化が起ったのである。

以後、スンダ語はジャワ語ばかりでなく、仏教やイスラム教などとの交流を通じてサンスクリット語やアラビア語などの語をも、特に敬意を表わす言葉として敬語体系の中にとり込んでいった。

Ⅲ. スンダ語の敬語法の体系

現在、"Undak-usukna basa"（言葉の階層）には五つの階層が含まれている。

	1.	2.	3.	4.	5.
言葉の階層	BASA COHAG	BASA KASAR	BASA PANENGAH	BASA SEDENG	BASA LEMES
	非常にぞんざいな言葉	常体的な言葉	2.と5.との中間的な言葉（ややあらたまった言葉）	謙譲する言葉	尊敬する言葉
例文	Geus nyatu	Geus dahar	Geus tuang , Parantos dahar	Atos neda	Parantos tuang
日本語訳	もう、食った	もう、食べた	（該当する日本語は無い）	もう、いただきました	既に、召し上がった

〈もう〉 geus, atos, parantos,
〈食べる〉 nyatu, dahar, neda, tuang

昔は別に第六の階層にあたった"BASA LUHUR"（最上の言葉）があったが、現在では使わなくなった。というのは、この言葉は王や貴族に対してのみ使われるため、それらの人々がいなくなるとともに自然に使われなくなったのである。また、奴隷に対して使ったような言葉・特に人格を無視するような不適当な言葉も既に存在しなくなっている。

上のような言葉の階層を、例文をあげながら説明してみよう。

1. BASA COHAG

非常にぞんざいな言葉で、動物に対してやけんかの相手に対して使われている言葉である。

例1. "Bangus sia !" 「だまれ！」

例2. "Babatok sia !" 「バカ！」

〈bangus〉や〈babatok〉という単語は動物の口や頭を表現するものであるが、人間に対して使うこともある。相手を動物に擬しているのであるから、相当に相手を軽蔑した言い方になるのである。従って、けんかをする時などの慣用的な言い方として使われることの多い表現である。

2. BASA KASAR

この言葉は親しい人に対して、又は話題になった親しい人について使われるものである。

例3. "Naha silaing kamari teu datang kasakola ?"
「なぜ、おまえはきのう学校へ来なかったのか」

例4. "Ari Ali geus cageur ?"
「アリ君はもう治ったかい」

（例3）は先生が自分の生徒に対して言うような場合である。〈naha〉は〈なぜ〉という意味だが、BASA SEDENGでは〈kunaon〉、BASA LEMESでは〈kumarginaon〉と変化する語である。〈silaing〉は〈おまえ〉という意味で、同じく〈maneh〉・〈anjeunna〉と変化する語である。

	BASA KASAR	BASA SEDENG	BASA LEMES
〈な　ぜ〉	naha	kunaon	kumarginaon
〈あなた〉	silaing	meneh	anjeunna
〈来ない〉	teu datang	teu dongkap	teu sumping
〈も　う〉	geus	atos	parantos
〈治　る〉	cageur	sae	damang

このように、BASA KASARは無敬語的な言い方で、日常的な家族間の会話や親しい人の間での会話などで用いられる言葉である。

3. BASA PANENGAH

BASA PANENGAHはそれ自体では固有の単語を持っていない。BASA KASARと後述のBASA LEMESとを適当に組み合わせて使う言い方である。

例5. (1)聞き手が非常に親しいか目下の場合→BASA KASAR

"kudu datang"「必ず来いよ」

(2)聞き手が目上の場合→BASA LEMES

"kedah sumping"「必ずおいで下さい」

(3)聞き手が少し目下か親しい人の場合→BASA PANENGAH

"kedah datung"「該当する日本語は無い」

(4)聞き手が少し目上か親しくない人の場合→BASA PANENGAH

"kudu sumping"「同上」

	BASA KASAR	BASA SEDENG	BASA LEMES
〈必ず〉	kudu	kudu	kedah
〈来る〉	datang	dongkap	sumping

このように、BASA PANENGAHはBASA KASARを使っては失礼にあたり、BASA LEMESを使ってはあらたまりすぎると判断される場合に使われる用法である。あらたまった言葉を交えながら、場面や状況にふさわしい調子で表現しているのである。話し手と聞き手との上下関係の判断によって、先ず動詞が決定され、その後両者の位置関係を場面や状況に応じて、副詞の使い方で調節するのである。

このように、BASA PANENGAHは人間関係の微妙な違いを表現する用法で、日本語における丁寧語のような働きをすることもある。

4. BASA SEDENG

これは話し手自身と身内の行為に対して使う言葉で、親しくない人や目上の人に向かって話す時に使われる用法である。

例6. "Abdi teu acan neda"

「私はまだいただきません。」

例7. "Ali enjing bade mios"

「アリがあした参ります」

	BASA KASAR	BASA SEDENG	BASA LEMES
〈食べる〉	dahar	neda	tuang
〈行　く〉	leumpang	mios	angkat

BASA SEDENGは例文からも明らかなように、この用法独自の単語を用いて、一人称側に属するものについて、敬意の対象に対し謙譲的に行う敬意の表現である。

5. BASA LEMES

これは、聞き手が親しくない人や自分より目上の人である場合に使われる用法である。また、目上の人を素材として話す場合にも使う言葉である。

例8. "Dupi bapairaha bade angkat ka Jepang teh? "

「おたくはいつ日本へいらっしゃるのですか」

例9. "Tuang rama parantos kulem? "

「お父様はもうお休みになられましたか」

	BASA KASAR	BASA SEDENG	BASA LEMES
〈行く〉	leumpang	mios	angkat
〈父〉	bapa	pun bapa	tuang rama
〈もう〉	geus	atos	tparantos
〈寝る〉	sare	mondok	kulem

BASA LEMESはBASA SEDENGと同様に、それに属する固有の単語を使って、話し手の第二・三人称側に属する人に対する敬意を表現する言葉である。

Ⅳ. 日本語の敬語法との比較

1. スンダ語の敬語法と聞き手との関係

日本語の敬語の分類については様々な説があるが、代表的なものは尊敬・謙譲・丁寧の三分法と、時枝誠記氏の詞・辞の二分法であると考える。三分法における尊敬語・謙譲語は二分法では「詞に属する敬語」とされ、丁寧語は「辞に属する敬語」とされている。私は、時枝氏の二分法を手掛りとしてスンダ語の敬語法について考察を進めたいと考える。

時枝氏は『国語学原論』で、敬語における二つの領域について次のように説明しておられる。

> 敬語には二つの領域があって、一は言語主体の直接的な表現に属するものであって、敬意の対象は明白に場面即ち聴手である。二は、場面の制約に基づくものではあるが、素材に対する上下尊卑の関係に対する識別が存し、その故にこれ亦敬語と称することが出来るが、ある対象に対して敬意を表現しているというものではない。(1)

ここで述べられている聴手に対する敬意に関わる敬語が「辞に属する敬語」であり、素材の認識把握の仕方に関する敬語が「詞に属する敬語」である。つまり、この二分法は話し手の敬意の方向が聞き手に向けられているか、素材に向けられているかという点に成り立っていると考えられる。

そこで、この二分法とスンダ語の敬語法とを対照させると、先ず第一に気がつく点は、スンダ語には「辞に属する敬語」（丁寧語）がないということである。

例えば、次の文を比較してみよう。

例10. 「あの方はそこにいらっしゃいますか」

例11. "Jalmi itu angkat ka ditu ?"

例12. 「私はそこに参ります」

例13. "Abdi mios ka ditu"

（例10）では〈いらっしゃる〉という尊敬語は会話の素材になっている人物に対する敬意を表現しており、〈ます〉という丁寧語は聞き手に対する敬意を表現している。従って、この文を親が子に対して話す時には〈ます〉は無くなって、「あの方はそこにいらっしゃるの」というような表現になる。

ところがスンダ語においては、話し手と聞き手との上下尊卑の関係には関わりなく、常に（例11）の敬意表現しか存在しない。（例12・13）のような謙譲表現の場合でも同様のことがいえる。

このように、日本語には話し手の聞き手に対する敬意表現としての敬語（丁寧語）があるが、スンダ語においてはそのような敬語は存在しないと言って良い。

2．スンダ語の敬語的人称について

スンダ語では、敬語を使う際に聞き手に対する配慮を除外して考えることができた。そこで、問題は素材と話し手との間にあるわけだが、この問

題に入る前に、素材だけを取り扱って敬語法を考える「人称説」との関連について考えてみたい。「人称説」というのは山田孝雄氏の説[(2)]である。氏は、敬語が「称格」（人称）と関連するところに敬語の文法的法則性があるとし、「謙称」と「敬称」との二分法を立てられた。「謙称」は「他に対して謙遜する意をあらわす語にして、主として第一人称に立てる者が自己をさし、又は自己に附属するものをさしていうに用いる」ものであり、「敬称」は「対者又は第三者に関する者をさして尊敬の意をあらわすものにして第二人称又は第三人称をいうに用いる」ものであるとする。

スンダ語の敬語法を考える際に、日本語との関連から最も注目されるのは、この山田氏の人称の概念による分類である。

例えば、スンダ語においては次のように人称によって変化する。

品詞	基本形＼称格	第一人称	第二・三人称
動　詞	datang 〈来る〉	dongkap	sumping
名　詞	imah 〈家〉	rorompok	bomi
形容詞	hese 〈難しい〉	susah	sesah
副　詞	geus 〈もう〉	atos	parantos

このように、スンダ語の敬語法と人称との結び付きは日本語におけるそれと比較するならば、より明白なものであることがわかる。

しかし、日本語における敬語法が人称によってのみでは説明し尽せないのと同様に、スンダ語においても人称説のみではその敬語法の全体を覆うことはできない。

例14.　「子どもが申し上げる」

例15.　“Pun anak nyarios”

例16.　「お子様はいらっしゃいますか」

例17.　“Kagungan putra ?”

（例14）の場合、〈子ども〉は一人称ではないが、一人称側のものと考えて〈申し上げる〉という一人称の場合に用いる「謙称」を使っている。スンダ語においても（例15）のように〈話す〉という動詞〈nyarita〉の一人称形である〈nyarios〉を用いる。（例16・17）の場合も同様に、〈子ども〉が〈あなた〉の側に属するものとして考えられている。そこで、いわゆる敬語的人称という考え方が生まれるのであるが、（例14・15）の場合は〈子ども〉は直接の敬意の表現者ではなく、むしろ話し手の敬意が表現されていると考えることができる。（例16・17）においても敬意の対象は〈子ども〉ではなく、その親に向けられていると考えられる。従って、スンダ語においても、敬語を用いる際に重要な点はその文の文法的な主語ではなく、その文が実際に話されている場面での話し手と素材との関係なのである。

3．敬語の絶対・関係の別について

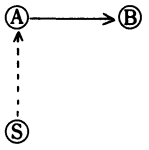
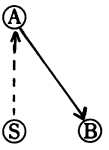
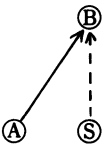
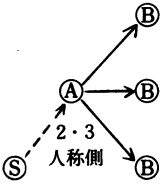
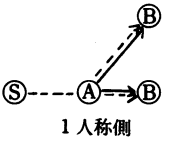
日本語では、「詞に属する敬語」において、素材間の上下関係と話し手と素材との上下関係の両方を一気に表現する「関係敬語」が存在するといわれる。

例えば、辻村敏樹氏は絶対・関係の別について次のように述べておられる。

> 「AがBにお与えになる」とか「AがBにお貰いになる」とかいう絶対敬称の場面には、AとBとの上下関係は不明（乃至無規定）ですが、話し手（S）はAを自分より上に見ていると言えます。
>
> ところが、右と同じ授受の関係の表現でも、(1)「AがBに下さる」、(2)「AがBにさしあげる」、(3)「AがBにいただく」等の関係敬語の表現となると、(1)ではA＞B，A＞S、(2)と(3)ではB＞A，B＞SというようにA乃至BとSとの関係以外に、AB相互

の関係がその表現によって表わされます。(3)

そこで、辻村氏の言うこのような素材間の上下関係の把握に基づいて使われる関係敬語とスンダ語の敬語法とを比較してみよう。

<table>
<tr><td>①AがBにお与えになる</td><td>②AがBにくださる</td><td>③AがBにさしあげる</td></tr>
<tr><td> 
</td><td> 
</td><td> 
</td></tr>
<tr><td rowspan="2">A：行為者
B：行為の受け手
S：話し手
→：行為の方向とABの上下関係
┈：話し手の敬意の方向</td><td>④A maparin ka B</td><td>⑤A masihan ka B</td></tr>
<tr><td>(BASA LEMES)
 
</td><td>(BASA SEDENG)
 
</td></tr>
</table>

①は、素材となっているA・B間の上下関係がわからない場合の絶対敬称である。②は、AがBより上位にある場合の関係敬称であり、③はその反対にAがBより下位である場合の関係謙称である。

ところがスンダ語においては、素材間の上下関係は問題にならずに行為者と話し手との上下関係によって敬語が使い分けられる。行為者が一人称側に属するか、二・三人称側に属するかということが敬語使用法の重要な鍵となっている。従って、⑤の場合のように行為者が一人称側に属するものである時には、行為の受け手であるBに対する敬意が成立するが、④の

場合のように行為者Aが二・三人称側に属するものである時には、敬意の方向は専らAに向けられ、行為の受け手であるBに対する敬意は存在しない。

このように、スンダ語の敬語法においては素材となっている行為者Aと行為の受け手Bとの上下関係は全く無視され、行為の主体者と話し手との関係、敬語的人称によって敬語の使用法が規定されているのである。そこで、スンダ語の敬語法は辻村氏の分類による絶対上位主体語・絶対下位主体語だけで、関係敬語は存在しないと考えることができる。

V. 結び

スンダ語の敬語法の特質は、敬語的人称によって敬語の使い方が決定されるという点にある。話し手と話題の素材における行為者、それは話し手自身や聞き手であり、第三者であったりするわけだが、その関係が認識されれば敬語の使い方も自ずから決ってくるのである。

つまり、スンダ語の敬語法は二者の関係を基軸として展開するものであり、スンダ語の敬語法が示し得る人間関係は基本的には二者の関係だけであると考えることができる。日本語の敬語法が三者以上の錯綜した人間関係を表現し得るのに比べるならば、スンダ語のそれはより単純なものといえるだろう。

しかしながら、スンダ語の敬語には名詞・副詞・形容詞などの動詞以外の単語においても敬語的人称による使い分けが存し、このことが人間関係の微妙な違いの表現を可能にしていると考える。

敬語が社会において果たす役割は、スンダ地方では、以前はその身分制度と結びついたものであった。しかし、近代化が進み民主主義化が進展する今日のインドネシア社会においては、敬語は決して身分の相違を表現するものではなく、より円滑な人間関係を維持するためにこそあるべきであ

ろうと考える。

注

（1）時枝誠記『国語学原論』（岩波書店・昭和32年）. p. 441.

（2）山田孝雄「敬語法の大綱」（『論集日本語研究』9・敬語、有精堂・昭和53年）、p. 38～39.

（3）辻村敏樹「敬語の分類について」（『論集日本語研究』9・敬語、有精堂・昭和53年）、p. 84～86.

〈付記〉

以上は、昭和54年度に提出された修士論文の要約である。原論文が各部分においていっそう詳細なものであったことは当然ながら、この要約において、たとえばBASA KASARやBASA LEMESの諸語形の成立・構成法についての説明部分など、ほとんど全部を省略した場合のあることを付記しておく。また、この要約が、著者の意図を誤まって、あるいは不十分にしか伝えていないのではないかとおそれるものである。（徳川宗賢）